

論文題目：瑜伽行派における種姓説の展開—初期瑜伽行派から中期瑜伽行派へ—

氏名：岡田 英作

論文要約

本論文は、初期瑜伽行派から中期瑜伽行派までの種姓説の史的展開を再構築することを目指したものである。一切の衆生が仏陀となる可能性や最終目標である菩提の獲得・般涅槃への到達に関する可能性を有しているか、或いは衆生の中にそのような可能性を全く欠いた者がいるかどうかは、仏教教理の長い歴史の中で議論されてきた、仏教の修行者自身にとっては修道論、衆生たちにとっては救済論の根幹を成す深刻な問題である。インド大乘仏教の瑜伽行派（Yogācāra）は、初期瑜伽行派の根本典籍『瑜伽師地論』（Yogācārabhūmi, 4世紀後半頃）を端緒として、この問題に対して“gotra”（種姓）という概念を中心に据えて向き合い、独自の種姓説を展開してゆく。以下、本論文の構成と併せて各章節の考察結果の要旨を提示する。

序論では、種姓（gotra）という語について概説し、瑜伽行派に至るまでの種姓説を概観した。そして、瑜伽行派における種姓説に関する先行研究を整理した上で、なお残される課題として、初期瑜伽行派から中期瑜伽行派への種姓説の展開の解明を挙げ、特にアサンガ（ca. 330–405）・ヴァスバンドゥ（ca. 350–430）の時代である中期瑜伽行派が空白地帯となっていることを指摘した。

本論の第1章では、初期瑜伽行派文献『瑜伽師地論』『大乘莊嚴經論頌』（Mahāyāna-sūtrālamkārikā）『中辺分別論頌』（Madhyāntavibhāgakārikā）の順に、全3節に分けて種姓説について考察を行った。

第1節では、『瑜伽師地論』を取り上げ、古層に属する「本地分」と新層に属する「撰決択分」とに大別した上で、『瑜伽師地論』内での種姓説を整理、考察した。まず、「本地分」においては、「声聞地」から「菩薩地」までの中で、種姓に関する基本的な規定が確立され、種姓説の枠組みが構築される。その枠組みの中に、三乗の種姓の種別に並ぶ、『瑜伽師地論』独自の、種姓に立脚したか種姓に立脚しないかの区別、すなわち種姓の有無による区別がある。種姓の有無による区別に関しては、修行者側の修道論的問題として、「声聞地」において般涅槃への到達可能性、「菩薩地」において無上正等菩提の獲得可能性、といった修行者が目指すべき結果を獲得する可能性の問題と連動して解説され、さらに、菩薩側の救済論的問題として、「菩薩地」において、三乗の種姓の種別と共に、菩薩が衆生を成熟対象や教化対象として区別する際にも用いられる。種姓説が修道論的問題として扱われるか救済論的問題として扱われるかという視点は、『瑜伽師地論』以降の瑜伽行派における種姓説の展開を捉える上で、重要な指標となる。次に、「撰決択分」においては、「本地分」以来の用語である（1）種姓に立脚しない者、「撰決択分」で新たに規定される（2）確定されてい

ない種姓、種姓説に代わる理論として提出される(3)真如所縁縁種子(真如を所縁縁とすることという種子)説の3項目が、種姓に関する特徴的な規定と言える。(1)種姓に立脚しない者に関しては、「声聞地決択」において、いわゆる五難六答を通じて、般涅槃し得る性質の永久にない者であることが決択される。しかし、「撰決択分」では、種姓に立脚しない者に関して、救済の可能性が問題とされて明確に否定されたこと以外には、議論の発展は認められない。五難六答と同趣旨の議論については、アサンガ著『顕揚聖教論』に継承され、さらに、種姓に立脚しない者については、『大乘莊嚴經論頌』やそれに対するヴァスバンドゥによる注釈書において、『瑜伽師地論』の教説の理解を踏まえて議論される。(2)確定されていない種姓に関しては、従来の種姓説の枠組みを超えて「撰決択分」に至って新たに規定された種姓に関する用語である。『解深密経』(Samdhinirmocanasūtra)における一乗に関する議論に端を発する、条件次第で菩薩と同じ結果を獲得し得る、無上正等菩提に進展する声聞の持つ種姓が、「有余依無余依二地決択」において確定されていない種姓であると規定される。しかし、確定されていない種姓という用語については、「撰決択分」にはこれ以上見出せず、『大乘莊嚴經論頌』への継承と展開、さらに、アサンガ著『撰大乘論』(Mahāyānasamgraha)における『大乘莊嚴經論頌』の受容を俟たねばならない。(3)真如所縁縁種子説に関しては、アーラヤ識説の中での雑染と清浄に関する議論と連動して、種姓説に代わる理論として提出されたものである。真如所縁縁種子説では、出世間的な法は真如所縁縁種子から生じると規定され、また、般涅槃し得る性質のある種姓の有無や三乗の種姓の区別は障害の種子の有無に拠るため、従来の種姓説が換骨奪胎される。ここでの議論の争点は、アーラヤ識に存在する出世間的な法の種子を認めるか否かであるが、『大乘莊嚴經論頌』『中辺分別論頌』といった初期瑜伽行派文献では、アーラヤ識という語自体が現れず、アーラヤ識説の中での雑染と清浄に関して問題とならないため、種姓説が採用される。真如所縁縁種子説を承けての展開については、アサンガ著『撰大乘論』所説の聞熏習種子(聴聞の潜在印象という種子)説を俟たねばならない。以上のように、「撰決択分」では、「本地分」以来の種姓に立脚しない者の救済可能性の問題、『解深密経』所説の一乗理解からの影響、アーラヤ識説の中での雑染と清浄に関する議論を承けるかたちで、大きく3方向に種姓説に関する議論が認められる。『瑜伽師地論』以降の瑜伽行派文献では、これらの方向性を文献ごとに継承して種姓説が展開されてゆく。特に、アーラヤ識説の中での雑染と清浄に関する議論に関しては、その議論に応じて種姓説が採用されるか否かが分かれるため、『瑜伽師地論』以降の瑜伽行派における種姓説の展開を捉える上で、重要な分水嶺となる。

第2節では、『大乘莊嚴經論頌』を取り上げ、『瑜伽師地論』との対応関係を中心に、『大乘莊嚴經論頌』における種姓説を整理、考察した。『大乘莊嚴經論頌』における種姓説の受容に関して、『大乘莊嚴經論頌』「種姓品」では、「菩薩地」「種姓品」が構成や内容上の基礎とされながら、「菩薩地」の他の章や『瑜伽師地論』の他の箇所には散在する種姓に関する教説が統合され、種姓説の体系化が推し進められる。『大乘莊嚴經論頌』における種姓説の

展開に関して、「種姓品」外と内という 2 つの視点から捉えることができる。「種姓品」外での展開は、「種姓品」第 6 偈所説の確定されたや確定されていないという種姓の区別に基づく。「述求品」の一乗たることを主題とする議論では、一乗たること理由として種姓の区別が挙げられ、確定されていない声聞を如何に大乘に引き込むのかが中心課題とされるように、確定されていない者に関しては、『大乘莊嚴經論頌』の種姓説の中でも、仏陀側の救済論的問題として取り上げられるが、それだけではなく、『大乘莊嚴經論頌』において、この他にも認められ、さらに、ヴァスバンドゥ著『大乘莊嚴經論釈』(Mahāyānasūtrālamkāra-bhāṣya) に基づけば、他の章でも扱われる。従って、確定されていない者は、『大乘莊嚴經論頌』において「種姓品」以外の箇所でも議論の中心となる種姓説である。一方、「種姓品」内での展開は、第 2 偈や第 4 偈における種姓に関する規定に基づく。第 4 偈所説の徳性を引き出す (guṇōttāranatā) という語義解釈による種姓に関する規定に基づいて第 9 偈と第 10 偈、第 2 偈所説の種姓の存在根拠としての 4 種の区別が敷衍されるかたちで第 12 偈と第 13 偈といった「種姓品」内の後の偈頌で、種姓に関して説示される。以上のように、『大乘莊嚴經論頌』における種姓説は、「種姓品」外と内とでの展開が認められるが、両展開共に「種姓品」の規定を踏まえている。

第 3 節では、『中辺分別論頌』を取り上げ、種姓という語が見出される偈頌の考察を中心に、『中辺分別論頌』における種姓説を整理、考察した。『中辺分別論頌』では、種姓に関する記述が、『瑜伽師地論』『大乘莊嚴經論頌』に比べると遥かに少なく、僅か 2 偈に見出されるのみである。この 2 偈には、『瑜伽師地論』「本地分」の「声聞地」や「菩薩地」の所説との対応が認められる一方、「撰決択分」からの影響が認められない。『中辺分別論頌』における種姓に関する記述は、『瑜伽師地論』に対応が見出され、『瑜伽師地論』における種姓説の理解を超えないため、独自性を見出し難い。

第 2 章では、中期瑜伽行派論師アサンガ、ヴァスバンドゥの順に、全 2 節に分けて種姓説について考察を行った。

第 1 節では、アサンガの著作から種姓に関する記述を取り上げ、アサンガによる種姓説を整理、考察した。アサンガによる種姓説の受容に関して、アサンガは、まず、『顕揚聖教論』において、アーラヤ識が種姓を把持するようなかたちで、種姓説とアーラヤ識説との両立を可能とした上で、『瑜伽師地論』の種姓説の中でも、新層に属する「撰決択分」より、古層に属する「本地分」を受容し、種姓説に基づく修道体系を構築する。種姓説としては、種姓の有無による区別の点から論じ、声聞、独覚、如来ないし菩薩という三乗の種姓の種別を取り上げており、そこでは、種姓説を菩薩側の救済論的問題としてだけでなく、修行者側の修道論的問題としても扱っている。次に、『撰大乘論』において、自身の文中では種姓について直接触れることはなく、『瑜伽師地論』「撰決択分」所説の真如所縁縁種子説の問題意識を継承して、「所知依分」の中で、アーラヤ識説の中での雑染と清浄に関する問題を議論し、種姓説に代わる新たな理論として、聞熏習種子説を提出する。一方、「彼果智分」の諸仏の法身に関する一連の議論において、『大乘莊嚴經論頌』からの引用ないし類同文と

いうかたちで、種姓に関する記述を確認できる。そこでは、『顕揚聖教論』で説かれるような種姓の有無による区別ではなく、種姓の確定・不確定による区別に関心が移っており、また、仏陀から見た種姓という観点からに限って種姓説を取り上げ、いわゆる仏陀側の救済論的問題として扱う。それに伴い、種姓説が関わってきた修行者側の修道論的問題の側面が弱まり、修行者自身の種姓の問題については、種姓説に代わり聞熏習種子説に担わせている。最後に、『聖解深密釈』(*Āryasaṃdhinirmocanabhāṣya*)において、瑜伽行派における種姓説を受容するが、種姓説に関する独自性を見出し難い。アサンガによる種姓説の展開に関して、アサンガは、『仏随念注』(*Buddhānusmṛtivyūṭti*)において、種姓という語がない注釈対象に対して種姓という観点から注解を施すという点に、種姓説の独自の展開を見ることができ、『撰大乘論』と同様に、種姓説を仏陀側の救済論的問題として取り上げている。種姓の確定・不確定による区別を適用することで、種姓を三乗の何れかに確定された種姓と確定されていない種姓とに分け、何れの種姓にも救済可能性を認めている。このように、種姓説に関して、種姓の有無による区別から種姓の確定・不確定による区別へと用法を次第に移行し、また、仏陀側の救済論的問題として扱うようになる点に、アサンガによる種姓説の特徴がある。

第2節では、ヴァスバンドゥの著作から種姓に関する記述を取り上げ、ヴァスバンドゥによる種姓説を整理、考察した。ヴァスバンドゥは、『唯識三十頌』(*Triṃśikā Vijñaptimātratā-siddhi*)などの自身の著作の修道論的文脈において種姓という語が確認できない以上、修行者側の修道論的問題として種姓説を扱うことには消極的であったと言える。ヴァスバンドゥによる種姓説の受容に関して、ヴァスバンドゥは、まず、先行する瑜伽行派文献における種姓に関連する記述に対して注解を施すかたちで、『大乘莊嚴經論釈』、『中辺分別論釈』(*Madhyāntavibhāgabhāṣya*)では初期瑜伽行派の種姓説、『撰大乘論釈』(*Mahāyānasamgrahabhāṣya*)ではアサンガの種姓説を受容し、また、大乘經典に対する注釈書において、経文における種姓という語の有無に関わらず、種姓という観点から注解を施す中で、種姓説の受容を窺い知ることができる。しかし、殆ど全ての解説について、初期瑜伽行派における種姓説の理解の範囲内に基本的に収まるため、独自性を見出し難い。ヴァスバンドゥによる種姓説の展開に関して、ヴァスバンドゥは、『仏随念広注』(*Buddhānusmṛtīṭikā*)において、アサンガと同様に、種姓説を仏陀側の救済論的問題として取り上げている。しかし、三乗の種姓、確定されていない種姓に、無種姓を加えて五種姓を数え、衆生の中に救済可能性が永久にない、種姓のない者の存在を認めている点に、アサンガとの相違がある。さらに、この点から、瑜伽行派における五種姓説の成立年代は、ヴァスバンドゥまで遡ると言え、『仏随念広注』以外の注釈書を含めた、五種姓説の中の無種姓に関する理解に、中国や日本仏教における法相宗の教義として知られる、いわゆる「五姓各別」説との共通性が認められる。このように、アサンガが『撰大乘論』や『仏随念注』で種姓のない者について扱わないのに対して、ヴァスバンドゥが『仏随念広注』を始めとした注釈書において種姓のない者に再び焦点をあてる点に、ヴァスバンドゥによる種姓説の特徴がある。

結論では、本論の各章節での考察結果の要旨を提示して、初期瑜伽行派から中期瑜伽行派までの種姓説の展開について総括、俯瞰した。最後に、今後の課題として、次の 2 点を挙げた。まずは、中期瑜伽行派以降の種姓説の解明である。ヴァスバンドゥと同時代とされる『入楞伽経』(Laṅkāvatārasūtra)『宝性論』(Ratnagotravibhāga)における種姓説や、中期瑜伽行派よりも後代の文献として、『現観莊嚴論』(Abhisamayālaṅkāra)、後期瑜伽行派の注釈文献、中観派(Mādhyamika)文献における種姓説に関して従来研究成果を再検討した上で、種姓説の展開を明らかにしてゆく必要があるだろう。次に、初期瑜伽行派、特に『瑜伽師地論』「本地分」における種姓説とそれよりも前の種姓説との関連性の解明である。初期瑜伽行派における種姓説が瑜伽行派に至るまでの種姓説とどの程度の繋がりを有しているのかについては、瑜伽行派との関係が深い大乘経典や説一切有部(Sarvāstivāda)文献を中心に、網羅的に検討してゆく必要があるだろう。